

瀋陽、大連で柔道を教え、教え子の中には韓国京城でのオリンピックに参加し六位入賞した子も、またバルセロナでメダルを取った女子もいました。

中国に骨を埋めるつもりでいたのですが、一九九五(平成七)年八月に、事情があり中国で結婚した妻と子供一人を連れて日本に帰ってきましたが、帰る前に人民日報で「日本軍の残置した化学兵器が東北で、華中で大量に見えられた」と、毎日のように報道されていました。戦後半世紀以上も経過していますが、残留孤児、残留婦人などの問題を含めて、まだまだ戦後は終わっていないと痛切に感ずるところです。

大連からの引揚げ

東京都 千葉 徳子

渡満から終戦まで

私は昭和五年東京で生まれ、家族は父母と兄二人の五人で、父の職業は社会事業関係だったので収入が少

なかった。家は自分のものであったが、その職場には将来子供たちを十分に教育していけそうもなかった。そこで、両親は渡満することを決意し満鉄(南満州鉄道株式会社)に職を得た。私が数え年十六歳のときだった。

父の最初の赴任地は新京(長春)で、私は翌年その櫻木小学校に入学した。間もなく夏休みに父の転勤で四平街市に移り、その学校に転入したが、三学期ごろに再び大連へ転勤となり、下藤小学校に転入し、以来芙蓉高等女学校を卒業し、引揚げまで大連に在住した。

満州での生活状態はぜいたくではないが、内地に比べて物資が豊富で暮らしやすかった。父が満鉄の身元保証金(社内貯金)に、収入のかんりの部分を預金してしまうので、その分だけ家計をつまなければならぬといとよく母がこぼしていた。しかし、そのようにしてきりつめたためた身元保証金も終戦ですべて無に帰ってしまった。それを使っていれば、かなり余裕のある生活ができたものと、今もって残念な思いである。し

かし、昭和十九年ごろから大連も次第に物資が不足し配給制となり、行列しなければ必要なものが手に入らないようになった。それでも内地に比べれば、恵まれていた。

学校の方は十八年に英語の授業が全面的に廃止されて、次第に勤労奉仕が増え、校庭の半分ぐらいを耕して野菜を作ったり、防空壕を掘ったりした。体育の時間には薙刀の訓練が入ってきたし、また救急訓練も行われ、止血や三角布、包帯の巻き方などの実習をやらされた。体力作りのために徒歩大会が行われ、四十キロメートルを歩いたり、また夜行軍なども行われた。裁縫の時間には、軍服のズボンの仕上げ作業が学校に割り当てられてズボンの穴かがりやボタンつけなどをしたが、布地が硬くて非常に骨を折った。各自が責任を持ってやるために班制にし、班でまとめて仕上げなければならなかった。自分一人のために、定められた時間内にできなくて班全体に迷惑をかけないようにとあせるので、針が思うように動かなかったことを覚えていた。

二十年から学徒動員が始まり、私は四月から関東州廳に配置され事務補助として通うことになった。登校日は週一回であったが、他の学友もそれぞれ工場や保健所などに分散配置された。また数十人が陸軍の看護婦として入隊した。私もこれに応募しようと思ったが、父母の反対により断念した。

初夏になって教員不足のため、急きょ代用教員の速成教育のために一部のものが動員を解除された。私もその中に入っていて、数週間教育を受けに通学し、その後すぐに各小学校に分散して実習を行わされた。私は、母校の下藤小学校で一年生を受け持った。引揚げ後に、この代用教員の資格で教職につき、その後、正式に資格をとって定年まで勤務した人も何人かいる。私の家では、長兄が二十年四月東大入学のために上京したが、五月に召集令状が大連にきたので再び帰連し、慌ただしい壮行会を行って牡丹江の部隊に入隊した。次兄は、二十年の始めごろから肋膜炎を患って病床にたった。

十九年の終わりごろから時々空襲があったが、大し

た被害はなかった。しかし二十年八月になって各自の家の前に防空壕を掘るように指示があり、隣組が総出で作業にあたっていているときに、終戦の放送があった。「明日は重大放送がある」というので動員先の生徒たちも本校にもどり、当日は校庭で玉音放送を聞いた。しかし何だか内容が少しもわからなかった。放送が終わって校長が校庭の号令台の上に立った。どういふ内容なのか話されるものと生徒たちは期待していたのだが、校長は「とうとうこんなことになりました」と言われただけで、両手で顔を覆い上体を前にかがめるようにして男泣きに泣き出したのである。思いもかけない校長の取り乱した姿に私は「こんなこと」というのがどんなに重大なことか悟った。校長は歴史の授業で生徒たちに神勅「豊葦原の瑞穂の国は——」を暗唱させ「このご神勅があるから日本は決して負けない。無窮である」と常々断言していたのである。その彼にとつて、あの戦争の結末はどれ程ショックなことであったか。今もあの嗚咽する校長の姿が脳裏に焼きついている。

終戦から引揚げまで

これからどうなるのか、全く誰もが予測できない状況のなかでも、戦争は終わったのだからとモンペを脱いでスカートにはきかえ、覆いのとれた電灯の下で安心して食事をすることによって大方の人々は解放感を味わった。

しかし、それもほんのつかの間のことだった。一週間後には、はやくもソ連兵が進駐してきた。また中国人の暴動が始まり、街はにわかに危険な状態になった。ソ連兵の略奪、暴行、強姦などの恐ろしい事件が続発し、婦女子は当分外出しないようにという指示が出た。夜になると、遠くの方で暴動らしいざわめきが聞こえてきた。私の住んでいた満鉄社宅内は、まだそういう物騒な状態にはなっていないが、夜は皆息をひそめるようにして家にこもっていた。まるでゴーストハウンのようにひっそりして、コオロギの声ばかりが激しかった。あのときほど女に生まれてきたことを情けなく思ったことはない。

やがて社宅内にもポツポツとソ連の兵隊たちが現れ

て、目ばしいものを持ち去るようになった。略奪した腕時計をいくつも腕に巻きつけていて、時計が止まるところわれていると思っているらしいという話があちこちで聞かれた。私の家にも少年兵が二人やってきて、蓄音機とレコードを持ち去った。これは病床の兄にとって唯一の慰めになっていたものだけに悔しかった。他にも二、三、彼らにとって目ばしいものを持って行ったが、手荒なことはしなかったそうである。幸いに私は登校中だった。また中国人の子供たちがしばしば物盗りにやってくるので、常に鍵をかけ、洗濯物を外に干すときは監視していなければならなかった。ある時隣家に中国人がソ連兵を連れて入って行くのを偶然見た私は、急いで家人に知らせ、すべての鍵をかけ、外から見えないように隠れていた。やがてドアを激しく叩く音がし、何やらわめく声が出た。庭に回って窓ガラスをたたき始めた。しかし、ついにあきらめて去って行った。向こうは二重窓なので割るのを止めたのかも知れないが、もし侵入してきたらどんなことになったかと思うと、今でもゾッとする。

大連の星が浦、黒石礁という海浜地区は、高級住宅地だったので真っ先に家の接収が始まり略奪も早かった。その黒石礁に父を満鉄に世話して下さった一家があり、やはり家を接収されたので、私の家に引越してこられることになった。私たちの住む満鉄社宅街は、関東州廳の官舎街とも隣接していて、日本人が密集している地域で比較的安全だったからである。社宅街のはずれに、中国人の馬車集合所があった。そこは日本人客を相手にする馬車の御者と、その家族たちが住んでいる集落である。日本人によって生活を維持していたからか、戦時中も日本人にはわりと協力的で、愛国婦人会の人たちが寄付を募りに行ったときも応じてくれたそうである。そして戦争が終わっても、暴動や略奪なども起こさず、平穩に生きてくれたのは誠に有り難かった。もしかしたらが暴動を起こせば社宅街はめっちゃめっちゃになってしまったことだろう。引き揚げるまでここに留まれたのは実に幸いなことであった。社宅の間取りは和室八畳、六畳、四畳半の三部屋からなっていたので、ご一家四人は南の八畳に、私たち

は北の六畳に暮らすことになった。そして間もなくもう一家族が真ん中の四畳半に入居することになった。これは、奥地から避難してきた人たちを強制的に各家に割り当てて住むように指示が出たからである。家は一歳ぐらいの赤ん坊を抱えた若夫婦がこられた。それで引揚げまで、襖を境に三家族十一人が一つ屋根の下で暮らすことになったのである。互いにゆずり合い、もめることもなく暮らせたことは幸いであった。これは一人の赤ん坊の存在が大人たちの空気を和やかにしてくれる潤滑油の働きをしてくれたからだと思っている。

職を奪われた多くの日本人は、売り食いと、にわか商売で生計をたてなければならなかった。大抵はだれにでもできそうな食べ物関係の商売をしていた。大連駅前や大連運動場は日本人の物売りで商売の場となり、日本人、中国人やソ連人がごったがえしていた。また物だけでなく、奥地から着のみ着のままで逃げてきて食べていけない人が、赤ん坊や幼い子供を中国人に売っているというわさが耳に入った。それは、引揚げで

日本人が集結したときに、ソ連の上部からの通達として、もし子供を売った人がいたら、申し出ればとり戻してあげると告げられたので事実であったのだと知った。そのとき日本人たちは「スパシーボ（有難う）」と叫んで拍手をしたのだった。

私の家は、父が満鉄病院に勤めていたので、終戦後も引き続き病院にいられた。ロシアの管轄のもとで少ないながら給料をもらえたので、それで何とかやり繰りし、足りない分を母と病みあがりの兄とで金目のものを売りに出てまかっていた。何よりも食糧が非常に高価で、米などは手に入らず、主食はコウリヤンとトウモロコシの粉が主だった。それを何とか工夫して食べた。野菜も支那大根ぐらいでネギなどは高級品で口にできなかった。あるときどこからか香ばしい美味なおいのがしてきた。たしか昔かいだことのあるにおいなのだが、何だかしばらく思い出せなくて、やっとネギだとわかったほどである。今思うとよく体もったものだと思う。だから病みあがりの次兄は十分な栄養がとれないので、引揚げ時に重いリュックサックを

背負うことができなくて哀れであった。

終戦後の学校の状況

八月十五日以後一カ月ぐらいしてソ連の司令官の更迭により、次第に治安が落ち着いてきたので、小・中学校が再開した。授業科目で、はっきりしないが記憶に残っているのは、ロシア語、音楽、理科ぐらいである。学校も合併され、芙蓉高女には旅順からの転校生がだいぶやってきて人数が増えた。先行き不安ながらもまだいくらか余裕があり、二十一年三月三日には下藤小学校の講堂を借りて音楽祭が開催され、多数の聴衆が集まった。皆、何かしら慰めを求めていた。また卒業時には送別のための学芸会のようなものも催されたりした。しかし、これから日本人たちはどうなるのか引揚げ以外に何の目当てもなかった。「これから日本はどうなるのかしら？」と教室で皆が話し合っていたとき、一人の転校生が「これからは日本は民主国家になるのよ」としたり顔で言った。一体民主主義とはどういうものか私にはわからなかった。それまで、学校でも家庭でも教わったことはなかった。今まで軍国

主義で生きてきたのに、そんなに簡単に変わるのだろうか？ 私はその生徒に反発を感じたのだった。皆もわからないから黙っていた。

学校には奥地から開拓団の人たちが避難してきていて、作法室になっていた和室で暮らし始めていた。若い女の人たちは一様に丸坊主だった。男装をして逃げてきたのだ。それは奇妙な姿であった。どう隠しても女性であることはすぐにわかるのである。きっと昭和十八、九年ごろ、日本内地から開拓花嫁とうたわれ、希望に胸を膨らませて渡満した人たちだろう。その夢は無残にも引き裂かれたのだ。校庭にかまどを作って煮炊きしている彼女らの姿は悲しくも哀れであった。もし自分が彼女たちの立場だったら、この恨みをだれにぶつけたであろうか。戦争の悲惨さはまず弱く無力な者へ一番ひどくのしかかるのである。大連にいられた自分たちはまだまだ恵まれているのだと思った。

本来ならば五年卒業なのだが、学校の方針で四年で卒業ということになり、私たちは二十一年三月二十五日、官立大連芙蓉高等女学校最後の卒業生となった。

卒業証書は二人の先生による手書きのものであった。

卒業後引揚げまで

一年早い卒業で上級学校に行けるわけでもなかった。私は近くにあったドレメ洋裁学院に通い始めた。学院といっても個人の小さな塾程度のものであったが、戦後は、若い女子が急に殺到し洋裁を習い始めた。それは、長い間モンペで、洋服とは縁がなかった。自分で作る必要があったからである。もちろんさらの布地はほとんどなかったが、和服や男物の古ものなどをせっせと更生して身につけたのである。また、ソ連の婦人兵士や将校の妻君たちが競って洋服をこしらえさせるので、洋裁を習って、その注文を受けて物々交換をするためもあった。この学院にもソ連の婦女からの注文がたくさんきていたので、先生二人は、午前十と午後の二部に分けて授業をし、夜はその注文を手がけていたようだ。生徒たちにも少しずつ分けて縫わせていた。私も一度ブラウスを縫って黒パンとニシンの塩漬けをもらったことがあった。

この一年足らずの洋裁の勉強は、今に至るまで役に

立っている。引揚げ後も、洋裁の勉強を続けるつもりでいた。同窓生の中にはメリノール修道院に英語を習いに通っていた賢明な人もいくらかいた。

引揚げは二十二年二月ごろから本格的に始まった。それまで何回か、いよいよ引揚げが始まるというデマが流れ、その都度人々は惑わされた。またデマではないかと思いつながら、やはり気持ちが高揚し、荷物をまとめて、命令が出たらすぐ出られるように準備をするのだった。しかし結局デマだとわかると、いいようのない失望感に襲われ、もうこのまま帰国できないのではないかと不安になったものである。だが終戦後一年半たってやっと現実となり、地区ごとに引揚げが開始された。二月中旬ごろわが家が三大家族の中で一番先に出発することになった。近所の人たちが手伝いにくれて荷物をまとめ下藤小学校に集結し、そこからトラックで埠頭近くの実業学校に集められた。そこでは彼らが何か目ぼしい物を取るのが目的のようだった。

我々は各自三十キロくらいのリュックサックと布団

袋を持った。自分の荷物は自分で持たねばならない。

次兄はとても力がなくて運べなかつたので、私は大声をあげて他の人の助けを求め、どうにか点検を通過することができた。今思うと皆よく互いに助け合ったものである。現金は決められた額しか持てなかつた。もしどこかに隠しているのが発覚したら全員帰国できないと聞かされていたので、我々家族は、真正直にそれに従った。だが日本に着いてみると、収容所で日本円と交換する際になって、布団や衣服の中に上手に隠してきて、それを持ってない人たちに頼んで交換してもらっている抜け目のない人たちがいた。それを見たとき、自分たちの馬鹿正直さが悔やまれたが、しよせん我々にはそういう才覚が備わっていなかつたのだとあきらめるしかなかつた。

引揚船は貨物船で、深い暗い船底に荷物と共に一家族ずつたむろして座つた。船が実際出航し始めたときでも、私は「本当にこの船は日本に向かうのだろうか？どこかよそへ連れて行かれるのではないか」という疑惑があつて、心から喜ぶ気にはなれなかつた。着いて

みるまではわからないと思つていた。

船内でどのように過ごしたかあまり覚えがないが、三度の食事の際「めし上げー」と号令がかかり、家族の代表が甲板に登って行って割り当てるの食事をもらつてくるのだけはよく覚えてゐる。それによって時間の経過を知ることができたからかもしれない。日本に着くという前日、突然大きな波がきて船が大きく揺れた。その時ちょうど、急な階段を降りかけていた一人の男の人が、かなり上から落ちたのである。まさか急に揺れるとは思つていなかつたのである。それまで静かだつただから、手すりにつかまっていなかつたのではないか。皆が驚いて駆け寄つて助けたが、即死のようだつた。そしてすぐ水葬にされたのである。何と不運なことだろう、やっと日本に着くという間際に命を落とすとは。今もって引揚げというと、あの船底での悲痛な場面が浮かんでくる。

船は九州の諫早に着いた。小さな入江、穏やかな海、天気もよく誠に平和な感じだつた。人々は甲板に出て故郷日本の姿を眺めていた。その時、同船の一人の少

女が紺のベレー帽をかぶって軽やかに歩きまわっていた。それを見たとき、ああこんな物があつたのだと一種の驚きに似たものを感じた。防空頭巾以外には帽子らしきものを長らくかぶっていなかったし、かぶっているのを見たこともなかっただけに、何かまぶしくさえ見えた。やがて小舟に乗って引揚援護局の人がわれわれを出迎えてくれた。その人の挨拶は次のような言葉から始まった。「皆様長い間ご苦労様でした。国敗れて山河あり。日本は敗れましたが、山や河は皆様を迎えてくれます」。これを聞いたとき、私は全く驚きと感動が同時に込み上げてきた。なぜなら、敗戦後の苦しい状態の中で、こんなにも多くの招かれざる客が入ってきたならどんなに迷惑なことか、そして一体我々はどのような扱いを受けるのかと不安で一杯だっただけに、この思いもかけないねぎらいの言葉は私の心に深くしみ込んだのである。本当に敗れても国はちゃんと残っている。なんと有り難いことか、もし国土もなくなっていたら、我々は帰ることもできず満州で朽ち果てねばならなかったのだ。この時初めて国の存在

の有り難さを認識したといってもよい。

上陸に際して、消毒のため一人一人頭から体中にDTの白い粉がたっぷりかけられた。そして割り当てられた収容所に入った。三月一日ごろだったと思うが、そこでひな祭りがあつたように記憶している。二、三日して各自落ち着き先に向かった。そこにはすでに迎えるきている人たちもあつて羨ましかった。我々家族は東京に住みたかつたが、受人先がない者は入ることができなかった。引揚者は、皆何らかでも知り合いのありそうな所に身を寄せねばならなかつたのである。そこでやむなく父の実家のある岩手県に向かうことになった。岩手に連絡する時間など無く、勝手にそう決めたのである。

諫早からぎゅうぎゅう詰めの列車に乗り込んだ。荷物を床に積み重ねて、その上に座るのである。荷物が窓の高さぐらゐまであるから、立ち上がると天井に頭がつくほどだった。出入りは窓からするのである。途中車窓から外を見、小さな家々の煤けた軒が、手に触れるほど線路の近くに並んでいるのを見たときはショッ

クだった。満州では思いも及ばない光景だった。幼い時に離れた故郷内地に対する私のイメージは十有余年の間に次第に美化され、あこがれに近いものになっていただけに、その落差は非常に大きかった。上野駅で東北本線に乗りかえるとき、引揚援護会の手伝いをしてる人々の中に、下藤小学校の同窓生の男子がいた。懐かしさに話をしたかったが、すぐ移動しなければならず、二言三言交わしただけで別れた。以後一度も彼の消息を得ることはなかった。

岩手県の片田舎の父の実家は、何百年も続く農家で、昔は多くの田畑を有していたが、曾祖父の代で没落したという家柄だった。父はその家の三男一女の末子で、婿になるのを嫌って十八歳の時に東京に出たのである。そして五十歳を過ぎて、その実家に家族を連れて戻ることになったのだ。父は「ただいま」と言っただけでその家の敷居をまたいだ。後に続く私たちはおずおずと中に入った。家には父の長兄とその長男夫婦と三歳の娘、この長男も軍人で満州に行っていたのだが、朝鮮を経由して帰国していた。それに長女、次女、三女と父の両親

の大所帯であった。そこへ私共一家が転がりこんだのだ。そのうえ、父の次兄の一家がやはり横浜で戦災に遭い焼け出されて、実家の水車小屋で暮らしていた。また、実家の蚕小屋には知り合いの台湾からの引揚げ家族が住んでいたのである。

戦争犠牲者たちが皆本家を頼って集まってきたのだから、どんなに迷惑千万なことであつたか。しかし本家としての体面上、皆を受け入れないわけにはいかなかったのだと思う。戦後間もなかったから昔からの封建的な観念が自他共にまだ濃厚に残っていたのだ。そのおかげで私たちは身を寄せることができたのであり、感謝にたえない。私たち一家には六畳弱の日当たりのよい部屋があてがわれた。間もなくその縁先に杉の木製の皮で炊事小屋を作り自炊を始めた。苦勞して持ち帰った衣料が食糧となつて、しばらくそこで暮らすことができた。焼け出されて何も持っただけなかつた横浜の家族は、子供たちが小さくて働くこともできなかったから随分とつらい思いをしていたようだった。食糧配給はさつま芋のだが、大量生産のためにだけ作られ

たもので、なりだけは大きいが味が全くなく、喉を通
るようなものではなかった。それで山にいつて山菜や
栗をとって米に混ぜて食べた。とにかく食べられるも
のがあればよいという日々であつたから、ニュースな
どで戦後の再興のビジョンなどが語られても、一体い
つそんなときがくるのだろうかと思へた。そのころは
五年先などは、はるか遠くのことだと思へた。できなかつ
た。私たちが岩手に着いてしばらくして部落に電灯が
つくようになり、ラジオが聞けるようになったぐらい
であるから、その人たちはまだ全く東北なまりで話
し合っていた。だから私には彼らの話すことがほとん
どわからず、外国人の中にいるような感じであつた。

やがて長兄がシベリアに抑留されていることがわかつ
た。先に復員してこられた方から手紙があり、兄がハ
バロフスクで頑張っているということが伝えられた。
それは私たち家族にとって本当に喜ばしいニュースで、
やっと一つの希望ができたのである。次兄は栄養がと
れずに次第に弱って床に就いていた。何もしゃべらず、
じっと寝ている間、一体何を考えていたのかと思うと

かわいそうでならない。そして日本に着いて九カ月後
の十二月十九日、ついに帰らぬ人となつた。二十歳で
あつた。そのころ岩手ではまだ火葬のしきたりがなく、
兄は桶のような棺に入れられて土葬にされた。次兄は
生まれた時、母が病気で生死の境をさまよっていたの
で、この岩手に連れてこられて祖母によって三歳まで
育てられた。そしていま再びその地に戻り、まだ祖母
の存命中に岩手の土になつたのである。これも運命か
もしれないが、もし敗戦の憂き目にあつていなければ
人並みの人生が送れたかも知れないのに。やはり弱い
者ほど、酷に戦争の痛手を受けるのである。半世紀過
ぎた今でも、この兄のことを思うと、たまらなく哀れ
で涙があふれてくる。

翌年の二十三年の初夏、売り食いするものもなくな
り、働く先もないので、母の弟を頼って上京した。そ
して、その叔父の世話で立川の引揚寮に入ることがで
きた。引揚寮は古い材木で作られた二階建ての横長の
建物で、上下合わせて約二十部屋ぐらいあり、炊事場
とトイレは共同で、それが二棟あつた。立川には米軍

の空軍基地があったので、毎日軍用機がものすごい音をたてて寮の上を低空で飛行した。話など聞こえないほどの騒音だったが、人々は文句も言わずひたすら生きることに必死だった。

父の職探しが始まったが、なかなか適当なものがあるはずもなく、それでもやっと小さな繊維関係の事務所に職を得て勤めだした。私は洋裁を習うどころか、一日でも早く仕事を見つけないといけない状態だったが、仕事を得るのに少しでも有利になるようにまず神田の村田簿記学校で勉強することにし、三カ月間簿記の基礎を学んだ。これは後々大いに役立った。それで父の勤め先の近くの銀行で職員を募集していたので応募したところ、採用となった。その銀行までは片道一時間半以上かかるので母が反対したが、私はそれを押し切って就職した。引揚寮から当時の国鉄の立川駅までは歩いて二十分ぐらいあった。途中、駅近くの商店街に、いわゆる夜の女の溜まり場があったので、アメリカ兵と彼女らが歩いているのによく出くわした。そういうとき、一般の日本人は彼らを見ないように、

さり気ない風ですれ違うように気を付けた。もしも彼女らと眼が合ったりすると「何で見るんだ」とくっつかかられるからだだった。それは彼女たちが生活のためにやむなく敵国の兵士たちに身を売っていることを屈辱と感じていたからだと思う。しかし彼女らのおかげで一般婦女子は安心して歩くことができたのだから、彼女たちもまた戦争犠牲者なのだ。

長距離の通勤と初めての勤めでの緊張によるストレス、加えて乏しい食糧事情のため、勤めて半年でついに肋膜炎になり銀行を辞めなければならなくなった。両親は割と元氣なのに、若い自分が倒れるなんて実に残念だった。そのころ高い金を払えば病気に効く薬がアメリカ兵から手に入れることができるという話があったが、そんな金はなかったから、ただ静かに寝て自然治癒を待つしかなかった。せめて栄養にと牛乳を飲まされたが生臭くて飲めなかった。

そんな不運な中でも一つ明るい出来事があった。都営住宅が当たったのである。それは井の頭公園の近くにあり、立川に比べ都心にずっと近かった。二十四年

秋に引越した。住宅は二軒長屋で、六畳、四畳半の二間だったが、ともかくも台所とトイレ付きの家のかっこうを備えた所に住むことができたのは有り難かった。私は起き上がることはできたが、長く立っていることはまだ無理だった。毎日やることと言えば新聞の復員者名の欄を見ることだった。

二十四年秋ごろには、各地からの復員が始まっていた。そして十一月やっと兄の名前を見付けた。舞鶴から東京に着く日、父母が出迎えに行った。どういう姿で帰ってくるのかと想像しながら、私は寝て待っていた。帰ってきてリュックサックを下ろした兄は別人のような感じがした。昔のイメージがほとんどなくなって、少し小ぶりに見えた。四年間のシベリア抑留の生活によって、変わってしまったというか、変わらされたのだと思った。しかし、苦しい抑留生活で命を落とした方々がいるのに、ともかくにも五体満足で帰国できたことを神に感謝した。彼はシベリアで楽団に入っていた活動していたので、帰国してもその楽団と行動を共にすると言っていて、ほとんど家に落ち着かず出歩いてい

た。ときどき帰ってくると、シベリアで吹き込まれた唯物思想を語って聞かせるのだが、私たちにはなじめないものだった。復員学生には復学の恩典があるのだが、一向に復学する気配がなかった。しかし、楽団と一緒に帰国の上演をしながらあちこち回っているうちに、世間の状態がわかってきたらしく、復学の恩典のぎりぎりのところでやっと大学に戻って、家族をほめてさせた。そしてアルバイトをしながら学校に通い、めでたく卒業し就職することができた。

私は一年の療養の後、再び勤めに出ることができ、中小企業に職を得た。こうして私たち家族も世間の人たちと同じような戦後の復興の道を歩み出したのである。

結び

ローマ法皇が広島を訪問されたとき、「戦争は人間の仕業です」と言われた。まさに人間の仕業である。その仕業はどこから出るか、それは人間の心から出てくるのである。戦争の悲惨さをいくら述べても、人間の心が変わらないかぎり、戦争は再び繰り返されると

思う。現に世界では、いたる所に紛争がたえない。我々は一人一人謙虚に自分の心を見つめて、本当に大切なものは何かを見出し、それに基づいて生きていかなければならないと思う。それがたくさんの犠牲者のおかげで、生き延びられた者たちの義務だと思ふのである。

終戦五十二年目を迎えて

東京都 中村 八郎

はじめに

私自身、昭和十二年三月に渡満して以来、終戦後の昭和二十一年十月に引き揚げるまで、一度も日本に帰ったことがなかったのですが、その間、日本の経済的なことや軍事的なことなど、外交面でのいろいろな動向が、海外にいればいるほど気になるものでした。大東亜戦争が始まって以降、緒戦の大勝に酔い、日本の将来を見失ってしまったのではないでしょうか。当時の日本人のほとんど全員が、勝利を信じていたことと思

いますが、開戦と同時に日本の敗戦への軌跡が少しずつ敷かれていたことも事実です。

大日本帝国の崩壊

昭和二十年八月十五日、大日本帝国の崩壊の日がやってきました。満州にいた日本人は、最後には勝つんだ、勝つまで戦うのだと歯を食いしばって、毎日毎日を送っていたのです。これは満州ばかりでなく、どこの地域でも同じ気持ちだったことと思います。

私の小学校時代の親友も、中学校で机を並べた刎頸なぐりの友も、みんなこの戦いで死にました。小学校・中学校を通じての同級生、大野竹好君も海軍のパイロットとして壮烈な戦死を遂げたのです。

毎年、終戦の日がやってくるたび、数多くの尊い命の代償として敗戦というあまりにも高価なつけを払ったこと、そしていつ終わるとも知れない運命を背負わされていることに思いを馳せるとき、慚愧ざんきの気持ちで一杯になります。満州その他の外地からの引揚者が、営々として築きあげた私有財産をやむなく捨てて、命からがら逃げてきたのは、一体なんだったのかと、た